志り魚

へ 5
6488

茅川比鶴叟壽年年歩うごのまなこにうわ
い花阿弥陀まのわみちの麻にうち紅れ
しもひしきくのこまてうま帝しきれ
ゑまあをとてあけてつかさにいのわ露盛き
侍りし安をおめて初名の句もえたる
またいひてもれこのつまつく勝と七月十日
其の剣はわ泉にみやをとりつれきく親
雅のとのおしつ秋年のふまれまし八いのみせむ

尾陽雲林蔵文庫

へ5
6488
010186021571

さらぬわかれよりはや一とせにめくりて是暦
ま一翔ともなしかるに程経しかはきや
かくて風雅の眺をなす市中に芽寺に葬ら
れまゐらせ給ふし川名新花寺禄は山
城とのさかひに絶頂の般若台ハ雲外
禅師の遺跡にて此のむしも松のこころハ
一社峯にして当寺通りて勝地なれとも
わすれ死ハおもふにやまれしこころのあわ

れさハ此ところにまろひ来ぬてゐて と
寺僧に詳ならず宗門の疑ひをはらみて預る
ことをかたくそこれハ黒谷白然院の小
寺の墓地をこえかくる小石はかきの
若き者にわするてことはりのことく葬りぬ
此まゝはうち据をし なすもの八ちくまそ
後の人さのみ此の絶えたるを遠まきて
此の心くまれをのちしここに置たるの跡

あまたゝびみれど これかれが桜かゝめきん
ことさらふみとられハ此の桃[illegible]二のされる一冊
子をとりわくみるに[illegible]の句をえらひ
さるをまてしるのこもさすわ草名[illegible]とし
てあのはし人のおもふ[illegible]わその中に関ら
ぬあはれハ言ことのなくて句にかたりの[illegible]
是をさき[illegible]なわとて いま世に
おきひてえんまうて此名をかへしもとめし

ゆゑし[illegible]もそのまゝにとちつねいま文
何となしきえのつき情えそへて[illegible]に
みる人待る

天保庚寅秋

雨石

炭焼してひとく淋しき木の実かな　曽夢

さむく来て子供等に夜をさん　蒿乙

昔の手紙とく程やけさの蝶　仁邑

東西乃御堂見えけり神無月　梧珠

見送て去るうち鳩のたちさまし　雨塘

鈍いきむ先ツ立川や冬の朝　得芝

起ゐて時雨ゝ柿や小笹原　老樗

晴さまし八ツさへ見ぬ原の色　世南

文選　論類　王褒四子講徳論曰昔文王應九尾狐而東夷歸周武王獲白魚而諸侯同辭

熟田三歎似て周きのよきと狐のかたち八
こまかにとゝまかに思ひ鶯し　そのこと
田人の事に問はれてきくをえまほしきかな
うき法の中にありき

雲霧も日枝のかたちを雲の上　小満

大粒は[ほ]そ透まの雨粒のうち　越中 蓼芽

鶯のこゑうちさ日のあふ影移れ　鳳也

仁和寺

花のわれて雲ゝうしふれぬ花の露　棲霍

涼しさを舟のしる一葉かな　三篤

喰をて清て桔きさを氣しの鞋　沽人

数多経て叙律出きや冬の雨　虫蕉

戸の明ぬ町にして雪ふるの中　我竹

喰積のうへまで降る春の風　宇池

けふにして酒のうまみ汐干かな　汲文

河よりも先へ出る畑や朧月　去翠

少し町荒されすゝに柳かな　六桐

降まへにかゝる日影て春の旬　呂笑

蝶の来てらりてや砂の上　海人

たかみこそなつかしきを梅の清かほのかに　壺中

新葉の家根よりみゆる堀の松　耕雲

若葉かなうらぬ山田や妻の水　杜鶯

道芝を手に引夜を雲雀哉　一宵

若竹やしし寝るや月の梢　古老

七種やされを熟して見ぬふし責　杜厚

風来亭二句

いそかるに岩のでくる春し雨　水竹

若竹の清き人誘ふ朝の明し花のむ　喜可

ようきさもれてゆるに牡丹の比　梅裡
二日まて蕾しくまゐれきのに　素堂
明る日をそれ見たしやはつ雛　白超
身勤をなさぬ一間やこし志　嵐青
たる程ゆるき切もりくへて菰の中　承堯
擂きし花無関法四ッや箒木　芝石
土用過や此月かうわく毛虫根　而后
照らし乃付き二階の由緒の余　三九八　波丈

擂るまて一雨うける桃哉子南　由丸
咲くのとへうろこれぬ去年底　田鳳
椿子出ぬ八せとし寺小松原　貫山
畑の隈語て了かるや菜の花乱　雁吉
蓉まわ由輪子出来ぬ人様様の比　塞馬
荷風や様へふくきゆ子根　芝石
梅村に一茎まくふ小形須の子　大菜
若乃や一眠いさまふ雲の中　承堯

出かはりしくあるゝ家に火桶のはし　篁乱

一振り月しおかりきえ眺て　可大

啼こえやまだ浅はけうし葉の影　梅通

薄うみのう濡ぎ川筋の小きはれ　亀吉

世に出やとまだ知ぬ人かな里芽の梅　雲白

正月や肉入れ湯達ま春の宮中　桃鳥

蝶となるや菓子けりてふ並べさ　五笠

大松の陰に見あかする蕎麦の鍵　大巣

無うて哀持ちかけ柳しくの木　義雄

手提をなしてくはまや涅槃像　一楼

化たもとく先葉を芽に種ぐ菊　吉玉

紫陽花や折わりにせて是かわ　蓮寄

能きを梅や清水緑の流ぎくまうる　月底

出つくと松葉のくやちる能て　京池

うすきれ出産に一行なきまわるに　一楼

涼風よ出ありあるゝやまとかして　呉明

西月やいさゝか梅の二本かゝ　乐木

よき連や菊をやめてとゝろ堤　蓍居

名月やきわれハ出の城の形　エチゴ 素明

三保や稲出して田の磯とゝろ　梅室

吹初て芒なみらをしわれの　宗池

此年や虎のくく出る若居　盛年

ゑらいまよ蝶の下の鉢坊主　仝

我明る春をわくや雪の小ね　桃鳥

梅まゝみをきゝの子の形福寿草　風路

さえしれうおちき柳北の里陰く　雲山

わかやなきゝえゝる形のわか小松引　新湯

春の日うちに花もり雲やおもし山　梅通

芝露へふきまてちるや秋の色　芳英

霞の明き峯や夜半きえてそれ　玖池

はつ春の梅見に来る柳北の人　北峰

川春やみた絹るひとよちる店の庭　一圭

山間やむにをしぬ咲おろし　素玉
暑さるや河越えて暮るの空　桃鳥
よ太乃旅女旧宅
古き家やちりくく生きのきぬすれ　西月
よわりきぬ蝶や釣のむれ入る　仝
瀬ぬのてまり流会やふたまた路　徐仝
替鴬よりき幸しや古後の人　鳥洋
為後手向て筆伴しけり　桐生

菊むらに張てまつおもろの月の龍　百堂
よし風の町砂や峯の秋　月庵
一りまゆる小家来の木の柿ふり　仝
ひらおも八すゝ稲おやまくと意　蓬宇
川踊稲るもよう寺法出申わ　芋丈
妻の家や雲を見て話まむし行　桐白
鳴きさて路きゆまきて蛙の乳　梅室
塩濱よめてし梅さよ雲あてり来　仝

江の入の雲さや一片の遠く也　茂椎
若草の末よりて吉浦し蕪梅塚　悠之
引汐にまつ蝶まつ花の乱　仝
早苗のよしまし絶むの松の花　紀治
大粒なの雨すし松の水　竹庵
先ふる鳥る柳まつ々や蜂の風　芋大
須磨のわや朝日のおとれ谷合を　流芝
拾ひ新た忍く菊の花のわかふきつ行　イセ　一幽

華のちて折まし の雪の餘り未わ　一具
わんはるの笠の切よし庵松の稲子　董鋪
かの春をも拂ふ 鶏寺や雪しまさ　如嬉
餅は乞や日の出るの中や天る　黄山
氷の手に持てみなるへ雛壺の乱　三カ八　波文
早ら出て足ふもへぬ桂可東　宗沈
ちりのこさわるなりして菰の芙蓉　流芝
寝ぶりや仲ち来つれのいるぬ世話　三岳

蝶まふて子の肩にとんでとまりけり　完伍

信楽まで見えまでしらむ梅柳　菫常

ついでとて梅若が寺はあはれなり　三岳

梅花に火を焚て梅や梅林かな　あふ也

煙の有る山茶花に蕎麦田植かな　京化

何とて新しく見えける乃わかれかな　楓下

動かぬ水の色に見ゆる柳の風　抱儀

鉢うゑや春のちりくもとに蝶の色　全

菜の花に小松のもりあはれなる　呂川

山中や一瑞すみれさく[illegible]　蒼虬

うぐひすや手をもて結びての糸　梁郎

はや今日の花もはや三ヶ日　黄山

川柳や畑の嵐にうつる日士　鵬斎

陽つること朝日とかや柳かな　梅香

空も無しや風の柳の野のなかへ　由巷

何やらふ人出て来て摘む若草　嵐外

上京の謝に旅おもへて御和儀　楓下

猿ひきにふるる錦や衣ヶ織　全

虎の尾のあるる石子や峰の花　芋丈

苗代や昼ゆくあとのいそがし　飛竹

難数ふうて無縁競ふて鐘　完伍

極ふ人そや語暮ろけ來　一金

摂と人もえ尼のつまろや花の雪　エト　曽尼

帷子や暮ろわ総わ日に算數　如宣

撰新句

日のでやこよ山の峰あまた　桃葉子　雨伍

花粧の雪枝ともあらはし春の月　一宵

庭棒の出ると出ても飛ぶの那　十六　嘉尾

梅の香や馬を牽る一代をとる　梅程

蝶や峰をあそぶのちる花の　流芝

もみぢ見をもまさしき一夜の秋　甚杉

川端や木の葉に家みちのまくら鳥　サツマ　波文

寒菊やおのおの見たるまの鉦　梅通

けふしや由良の磐の渚まわり　楓下

藪にやとおもえたてる牡丹かな　東山

古川やどんとしたきこえまき　史子

姥の口やうそやさしくぬ事稀　雲白

一日の菊ちる小袖の出るさき盛　芝石

蝶の出る穴も経る古松の花　李曉

探花のめでたさや明日の月　蒼虬

空や小雲を空や空や鉢叩　去年　大含

本願寺学頭ナリ一日室也寺ニテ即吟ノ由吐眉子ノ話ナリ嘗テ聞大含師ハ詩翁ナリト誹ハモトヨリ不学詩ノ力ノ及所ト見エタリ

霜ねぶるさや老楽のつか園菊か　たよ

湯上りや指先かれて冬の秋　仝

涼しさのあるはえゆる姉の薫かな　たよ社中　清民

はしめて代の世の中の様で雉　惟州

墓や人よきられて鉢をはる　可大

去年ての宇へちがわり雀しの家　仝

榎のきも一もと涼き東路哉　蓬宇

花さかんたよわり松に何かなし　仙蓬

川ぬるく来てはなれ角力取　碧山

影高やよりそひ来る川の春　南石

蜻蛉かけ掬ひてもある水鶏かな　其山

暑さをしのぎ蝉みて涼しわか葉かな　可節

右百六十一句評老人草記抄

春硯子書　鶴

沙鴎

かてよき所に柳うゑる　而后

献出く あとの 隠れてなり　黄山

儀まつらし 墻の内まもらぬ

やかてまゐりし 肱の 尊くし　李袁

旅籠屋に 疎まれ 義も 月の友　梔島

まはらに 降る 露れ 下ち　芝石

畦築て 高きを過くれ 秋の風　極裡

貰ひ集めても 錫釈 荷作る　馬曉

角力すむ 人の 肱に 笑上手　金撲

火を渡し 山を おも 秋の うち　露井

盃捧て ひと膳さ出る 芝居　旭嶂

くるまに 付 髪の ぬけるわすれ　桃秀

待雨の 降かぬ 先てしよき 様見し　袁

うきこゑ 笑れ 蒼さし 月　應和

引掛くとましき町する蠑の湯　石
玄こゝろ有れ彼まて居る　李曠
竹日ふまと古びのつみもの杏　鵬居
行んしと叶ふ世牛の老手長　山
名ヲ
杣の華ヶ賑の灰けを掃て　一清
吹ふれや乃れ旅宿の安魁　鳥
京舎く酒言こてて村法度　知
来るしとまする井さらへの猥　我亮

わんさくやまの生芽ら姉娘　后
中にうら下き新北皮手くて　程
海鳥ら鏡音垂れ翔くしまよ　山
横ふ出てくて杣しあるやふ　居
樣もんて何わすまうみ赤わ台　思文
稲荷をも五件つ里ま際あけ　峰
出ふ月さ西の佳和ふ照まきて　曠
大喜井五田の田荊あしまる　信

名ウ

四人搦手芦を茂も侭まかせ　宸

由へ往て来て又揺ける寺　石

手植の緑あやまる右たり　石

ぬの面晴る市は引ヶ際　樵

とてつもと百ヶ花の衛咲　尭

まいし俳る庭の萩の芽　半嶺

沙鴎

三日月と片風けり傾きての南

こぼるる萩のとまらぬ手　梅裡

雨ふりてと手摺りけ来よ搦上て　西石

古の稀賓の辞宜きしきた行　旭嶂

覇に走りかしきまる馬の汗　裡

芝ともわすれぬ去年の常し宝　石

ウラ

童子の清書に村を廻りき　峰
奥のかしらの詰る力粕　裡
ゆく夏つかく入歯子に向て　石
縁にいつてきん坊主と来て居る　峰
この宮さ雪もさいめへ揮へ込　裡
冬ぬきある付し二日の月　石
手のひらに清書きしあれ出てある　峰
円顔すてのまゝ薬籠の湯気　裡

名ヲ

山庵敷の席入待る便あり　石
日の暮ぬくき波戸に人立　峰
椎の木に芽出て思案に屯して　裡
ありきもと帰て雪の人すむ也　石
大家の縁掃らる玉換ける　峰
鯨もいらん凧（タコ）の服にかけく　裡
何ゆえと評されぬと出笑れ　石
打撒の筋をこしらへて来る　峰

縫んまうきぬ襟に着かけて　裡
障子さす紙も寒き小漆　后
吹やうハとちらうかむ松の風　峰
出る盃おけく四る睡る鳥　裡
庭先へ何をうか揺る雲　后
打て居ても猶かはる侘　峰
うち染ふ比なき崩す尋の月　裡
かぬて立春の何の浄水　后

名ウ
旅越のまゝとおらは小田雨　峰
枕うつ音の聞中の家　裡
助ケ入てくれまる体も駕の老　后
めおし花の早氣ふらちまめ　峰
命あれ彼岸まうろ吾佛　裡
屋根より立る烽の三ツ四ツ　后

年内立春

行年のゆふくれにして春立ぬ　黄山

正月へとゝのふ春もかそへけり　西耕

咲よせや梅の間に出ほし菜　蒹葭

田一枚閑遠近やうめの花　木宗

裏表を人にとはるゝ梅の花　静波雄

余所にくもとゝ目にふれや梅白し　観鳥

紅梅や鏡の精のなき出なり　枝月

結ぬひく垣をかまへる案内かな　石鼎

嫁は替よても黄鳥の名のりけり　駅童

春の雪積るかへて降もせす　川サキ　東宇

春風やまたゝきしけるの明あかり　素白

打杭の腰つゝ湧く春の水　慶家

問よらん知らぬ旅の芽ばり哉　圭布

様子錦を手て織らぬ霞かな　盛雲

那行布の道をちまわり山の春　欽武

春風や畑よりたかき川の汐　南枝

松の花と柔の浅さとやちよかな　佳峰

ひとつまで遠ひやまを芝荻乃葦　白蝉

火をうつて八引返しまわる燕　蘭堂

一群を乗明てりやこゝろ雁　花史

うきし浅まぬきこえの空の先　魚波

椿落てけふりのうへや鳴雲雀　鳥谷

人の親はわかゝりて花と見ん　林曹

日和を延て乗ゆくあかりぬ花の雲　松什

まちかく人住先やちるさくら　布國

きじ啼やさし竹うれる畑の隅　杜有

谷の戸の中はなかなかや雉の聲　硯山

雉子啼や黒き日の暮く一林　鳥丈

そこら迄来て居る藪の雉子　呂鳳

宿に来て来て眠る風や桃の花　濵翁

春の色や先萌そめし日のあたる　芥舎

ひと所中の芝の下にてや梨の花　宅農

人の来て中ハきこえぬ蛙　農古

二夜ゆえてとうの子ふ雛や親とまる　祇白

山吹の汀にちりまたをし　禾明

春雨の風ふくうちる若葉ふる　芝石

眺めける見事にちる花の香　松歩

散しほのめくこともありてけしの花　而后

今朝見て菜を摘寸申しけれ　西鳥

あとの寄るき宵や水鶏の足音まで　庭雅

張渡し浮藻照る日や麦の秋　燕志

麦こぼす家の挿しや醫者の門　九山

ところ人来て思ふや余り苗　桂圃

今宵は雨とも見えぬ其里の月　旦見

麦踏や曲りにかゝる水の音　魯心

跡を深く見せて飛ぶ子に葉茶雑　宇郎

おもかげまさるむ塩や行々子　家之

蚊遣のほとりにとまる夕映の家　双鳥

漏桶の流れしてあるゝや蚊遣の上　菜園

麻の流れに蚊をみて瓢を流しの家　金令

若竹やのびくゆかりと茎のふたつ　桃秀

挿てまゐる百合庭の五月雨　石介

五月雨やおほえし道も牛の跡　有橘

借りし笠おもたくなりぬ藻苅舟　牧子

眼さむれは寝もかへつく鵜の足　春宮

是やこれ八坂の松やかくれ里　蹊秋

日のあたるさしかゝる雲や淡路島　馬勒

かきつはたやあさきふかく墨よ染河り　柳臺

あしたまて涼しさ見えく蚊の火　紫人

濱ちとり鳥になりえてまくみちしほ　茶瓢

あつまりや中宿ハ迄あるか川原　有底

只今道ハあつさ涼の手すれたり帆　茶静

掃よみて萩根を洗しられ揺　九善

夕立や庭の間はなまよ畑に鶴　丹嶺

ゆきなからよさて中小数のさかりかな　九峰

夕顔や一星起きて這入けり　霞井

たゞ出する竹藪もれる清水かな　互遊

鳴きつゝも木より飛まそて雲の峰　湊菖

汲みつゝやきて照日や鏡の色　夜白

さゞ浪やさゞ松風のきこえ川　鳥津

松風や声のやりとりあすかの　悠平

松ヶ枝の影また見すかな峰の松森　不鶴

新松や新りしても音たえんかな　司丈

若葉のやとてこゝまで水入れぬ一筆哉　御風

居(ヨヨ)つゝく名をかりしまゆ亮やはな　金進

ぬきもなく出て雲井(カラ)に取る夏とかな　野菜

涼しさのむすびあふ葉の月　梅曦

稲妻や北国らしき程や一ッ道　李裳

案山子見るうちも晴やむ秋の暮　一清

湖のしみる雲はおとや荻の声　酔雨

そよそよ荻とも志れぬ秋の暮　樸翁

川筋北へみなかる夜寒の秋　鳩巣

挑灯まのかれく寒き花火角　吏仙

落月の行きそこのやめ行く秋　省吾

古道や荻ふきわくるさみしけり　五株

ともかくの風あきかれて蝶きえし　戯帝

高西や来ぬ人まつや茶まだやや　黄年

うらうらの水もすなへの蝶の系　踏水

先されし夕日うつらむ舟の宿　蝶兄

月まつましるしの注来や川向ひ　梅裡

田の水の志ささる寺や月の道　思文

霧ふかき中よりおこり出る真月見かな　可暁

名月やまくれハ川の名もかはる　蓬瑚

名月や雲よりもれし橋の銭よ　宜彦

月と雪鳥鵜比墨けしく汀千鳥　瀬月

物中といふ客もなし月の庵　壺水

月澄や橋のゆれにも眼のとく　伯逸

打よりて隣牛もまた来たる哉　野童

萩ハ垣のうちよりなし月見まつり　五風

はらくと何やらまそかある野分かな　百鳥

山陰やまる失ふほれて笠の露　雚叟

屋根もりのおもふる里の様かな　琴魚

寒江の橋の露おきて庵や十三夜　（イハラ）东宇

村中に茸うる頃祝れけり　六紫

稲千や渋かきを杖に恋抱法　松菓

其一つ来て新ぎるふや萩の露　玉峰

たゝき錢聞く味りふ新酒哉　為山

蘂文の毒出して買ふ彩酒の家　鵬居

梅の香の二度みのなき求さらの札　玄生

折ゝの薔薇花さしくされ来　得蕪

去ゝりや秋の静さよ霧おりく　祖郷

芭蕉さし葉広きやゝ荒れ月　湛石

残暑の〳〵て庭の小きての菊　菓像

水仙や戸錦よ匂つ付温り古　蓍雨

稲の穂んこ落れてみな年ことりと　流芳

山茶花や咲て霰て文字の川　三和

庵なる錦ちもに打石蕗の花　風水

宮茶や切りおしく〳〵菊の中　鼎左

寒菊や花の行くをありのまゝ　二泉

風さへ物かりし寒さをもとむ枯野哉　且高
雉ちの寸程を氷りの枯尾花　石禾
むまくし小干上る舟や冬の月　李曦
枯山の名さえゝ冬か入日郷哉　祖可
小寺の庵に稲宮の往来や冬木立　駐松
人並の世をつゝむ冬の菊哉　對家

風邑を眠ておるや浮生鳥　芭淵
清みツ井戸の往達寸寒さ哉　素英
日の節や蕎のしく深く田れ水　丁知
鳥の乃く一隅あまさて氷る雉　心河
空月や羽をうつかしぬ氷の鳥　梅笠
如月をおくりらき角なふし臥中哉　南之

以ゝ掃きさゝら楢山の庵哉　山蔭

篭に来ぬのかくやこそ冬の梅にも　桐一

豆腐煮る八百ふるまでゆかぬしぐれ哉　義東

深行まで畦の菜おもはゆかる　末巌

雪竿のはられてたるや山の上　竹烟

雪見舞うきて出る菜のわかれ　天平

野かりや志ほわらの降けり　相古

日のさしや二重にかゝる雪の山　菜山

音のしてみの子のつかゝ空きかれ　素汀

たちよきて窓し柱の声も上ケ　泥牛

傍らよ油うりきや燈の中　岳風

錦絵もに雁は出しはな利　碩哉

うしろも萱の明る年の市　梧由

みやまよ眉し緑や年の雪　桃島

道板に出かい近くとしのくれ　我荒

富田藏書